峯に上て見れば草木森々たり。谷に下てたづぬれば大石連々たり。大狼の音山に充満し、猨猴のなき谷にひびき、鹿のつまをこうる音あはれしく、蝉のひびきかまびすし。春の花は夏にさき、秋の菓は冬なる。たまたま見るものは山人が、たき木をひろうすがた、時々とぶらう人は昔なれし同法也。彼の商山の四皓が世を脱し心ち、竹林の七賢が跡を隠せし山かくやありけむ。峯に上りてわかめや生いたると見候へば、さにてはなくしてわらびのみ並立たり。谷に下てあまのりや、をいたると尋れば、あやまりてやみるらん、芹のみ茂伏したり。古郷の事はるかに思わすれて候つるに、今此のあまのりを見候て、よしなき心おもひいでて、憂くつらし。片海、市河、小湊の磯のほとりにて昔見しあまのりなり。色形あぢわひもかはらず。など我が父母かはらせ給けんと、かたちがへ（方違）なる恨めしさ、なみだをさへがたし。

（文永十二年二月十六日）